



● 巻頭エッセイ グローバル化時代のパラドックス..... 1	● 授業の玉手箱 「Haiku in English can be an interesting teaching material.」..... 4
● 2013 年度教員免許状更新講習3 報告 2	● 書籍紹介 『GAN-DO リスト作成・活用 英語到達度指標 CEFR-J ガイドブック』..... 4
● 『OJU 教職活動報告・研究 Vol. 4』の発行 3	● 2014 年度教員免許状更新講習1・2 案内 4
● 第2回「英語の教え方教室合宿」in 長浜（第29 回勉強会）案内... 3	● 編集後記 4

巻頭エッセイ グローバル化時代のパラドックス

中井 弘一

グローバル化の急速な進展は、広範な領域で大きな影響を与えつつある。英語教育においては、文科省の計画によると、歌や遊びを通じて英語に親しむ「外国語活動」を現行の小学5、6年生から小学3、4年生に前倒し、小学5、6年生は英語を正式教科として週3コマ程度、今の中学校のように教科書や専科教員らによる指導をする。さらに中学校は、今の高校のように原則として英語で授業を行い、高校は討論や発表などの実践力を重視する考えである。国際的に活躍する「グローバル人材」の育成をめざし、実践的な語学力の習得や、討論を重視した授業に力を入れたり、海外の学生との交流に取り組んだりする高校も増えている。

さながら、欧米から知識・情報を仕入れ、欧米と同じようになりうした明治時代の初期にタイムスリップした感がある。インターネットの急激な発展で世界がフラットな状況になったようである。Line や Facebook など繋がる生徒や学生の絆はフラットであるように思えるが、同時にオンラインという同じフレームの中に閉じ込められているようにも思う。同じ制服や同じブランドの服を着て、そこ（だけ）に通用する言語やカルチャーに染まっていく。フラットな社会は反面、個性や個人の価値観を薄れさせる。価値観を share することがかえって個人の価値観の喪失につながるというパラドックスが存在する。

グローバル化によって、自動車や家電メーカーなどの日本企業が利益を求め海外へと進出する。するとその結果として、日本の社会の雇用の空洞化が促進される。国内経済の停滞、雇用不安を招く結果が社会不安となる。フィリップ・コトラーは、「グローバル化は普遍的なグローバル文化を生み出す一方、同時にそれに対抗する力である伝統的文化を強化する」と述べている。遅れをとってはなるまいと、世界経済へのグローバルな対応に必死になる日本が、逆にナショナリズムを強め東アジアに緊張感をもたらしていると思われることも、グローバル化が生み出しているパラドックスかもしれない。

こうした中で、日本企業の中にはグローバル化という均質化に埋没するのではなく、ローカルなアナログを堅持している企業もある。朝日新聞（記者有論）に「ポッキーには、まねされないノウハウが詰まっている。『アナログ』は強い」という記事があった。スティックを作るにしても、その日の気温や湿度を確認する。まっすぐ、ムラなく焼き上げるために、生地を焼く温度を、気温や湿度に応じて人が経験的に微

調整する。そこにマネのできない味と食感が生まれるとのことである。

ワープロソフト、プレゼンソフトなどを活用するコンピュータ、電子黒板、iPad のような便利な電子デジタル機器を活用できる今の教育環境においては、知識の共有を等質で瞬時に行える。たとえば、全員が同じ教材や解答をいとも容易く得ることができる。デジタルの持つ均質性は誰が指導しても一定の内容を保つことができる利点がある。

授業では、教員が便利な PC を使った見栄えのよい丁寧なプリントを配付する。配付されるプリントは往々にしてデジタル的な穴埋めのワークシートが多い。生徒がその穴埋めを行うと、完成された学習ノートができあがり、素晴らしい成果のように思える。できあがりの品質は策定された結果の解答を求めるものなので、それなりのできあがりとなる。しかしながらそれは、生徒自身が考え・学習したものでなく、教員が敷いたレールを指示どおりに進まされているだけで、本人が自分なりに考え経験すべきプロセスをカットしており、過剰品質となっている。実際は、生徒の個々の学びのペースやステップに対応しきれていないのに、学びのプロセスがフラットに固定化されて、見かけ上均質な成果物を産みだしているように思える。

今流行りの電子黒板も素晴らしい機能を持っている。教材を効率的に提示することには目を見張る。だからと言って、昔ながらに黒板にカリカリ音をさせ生徒とのやりとりを板書して行う授業に効果がないと言い切れるだろうか。板書に流れる時間、個性的な文字、行間。そこに生徒は自分で考える時間という「間」を持ち、さらには先生の個性にも触れ心のつながりを形成していくのではないだろうか。誰が教えても同じ提示となるデジタル教育に先生の顔は見えにくい。アナログとデジタル、教育にはその両方が本来必要である。

グローバル化という名の下に、英語教育においても急激な改革が進むが、個々に応じたローカルな考えを取り入れないと、肥大化し過ぎて爆発するのではないだろうか。ビットコインのような仮想通貨が瞬時に消え去る現実がグローバル化を追い求めることへの社会不安を警鐘しているように思える。

参考文献

フィリップ・コトラー（著）、恩蔵 直人・藤井清美（訳）（2010）『コトラーのマーケティング 3.0 ソーシャル・メディア時代の新法則』朝日新聞出版
 近藤郷平（記者有論）「ポッキー 「細い体」に込めたアナログ」朝日新聞朝刊 平成 26 年 2 月 26 日（水）